

こしえるびと

つむぐストーリー vol.124

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。
“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”の
メッセージをシリーズで紹介していく。

「唐沢いちご」ブランドにふさわしい後継者へ

藤沢町藤沢 唐澤 歩未さん

進路に悩んだ末に

やわらかな四月の日差しに照らされる唐沢いちご農園。事務所の中には、イチゴ一粒一粒に目を配りながら、パック詰めにいそしむ唐澤歩未さんの姿がある。

同農園を営む両親の下に生まれた歩未さん。初めから農業をすると決めていたわけではなく、高校は普通科で勉強に励んだ。進路に悩んでいた高校3年生のとき、目に留まったのは岩手県立農業大学のパンフレット。気になつてオープンキャンパスに参加してみると、見る見るうちに農業の楽しさに取りつかれた。高校卒業後は農業大学校へ進み、野菜を専攻。再び進路を考える2年生の夏に新規就農ワンストップ相談窓口を利用し、研修生を経て就農することを決めた。

就農に向けて

研修を始めるに当たり、研修生は栽培する品目を自分で決める。歩未さんは家業のイチゴに加え、ミニトマトを選んだ。きっかけは、農業大学校での農家派遣実習で派遣先のミニトマト生産者の人柄に「心動かされた」こと。さらに、イチゴは冬季の作業が中心となるため夏にも何か作りたい、新しい品目にも挑戦したい、という思いもあった。

研修先は、千厩町と室根町のミニトマト農家。主に芽かきや収穫を中心に、作業に従事した。これまで勉強したことを生かそうと奮闘するも、なかなか思い通りにいかないことも多い。農業大学校では得られなかった新たな経験を積み、「充実した楽しい研修期間だった」と歩未さんは振り返る。

両親から学ぶ先には

この春就農を果たした歩未さんにとって、農業のやりがいには「野菜が成長していく姿を喜べる」ことにある。そんな歩未さんの目標はミニトマトの生産を続け、生産規模を拡大していくことと、両親のイチゴの栽培技術を受け継ぐことだ。

藤沢町に開園して25年の歴史を持つ唐沢いちご農園。父の宏之さんと母の仁美さんがこだわって作るイチゴはファンが多く、地域内外を問わず愛され続けている。歩未さんは後継者として技術を継承し、さらにより良いものにしていきたいという使命感を持っている。「この先、両親が築き上げた農園を受け継ぐ以上は、自分の手で発展させていきたい」。始まったばかりの農業者としての道を、力強く進んでいく。



PROFILE

唐澤 歩未さん (21)

Ayumi Karasawa

藤沢町藤沢

2003年藤沢町生まれ。高校を卒業後、岩手県立農業大学校で野菜栽培について学び、25年就農。両親と兄の4人暮らし。イチゴ25畝、ミニトマト2畝。

